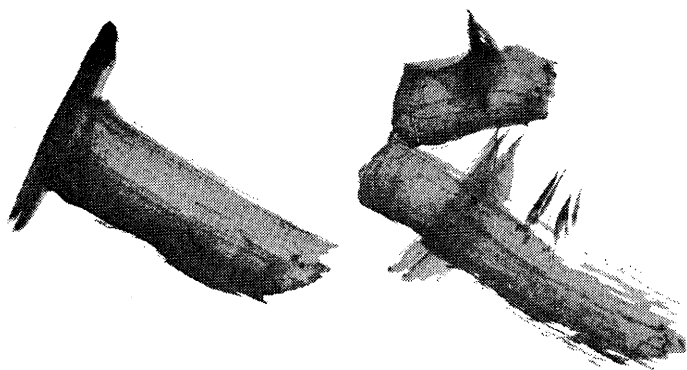




第 三 四 号



1 9 8 8

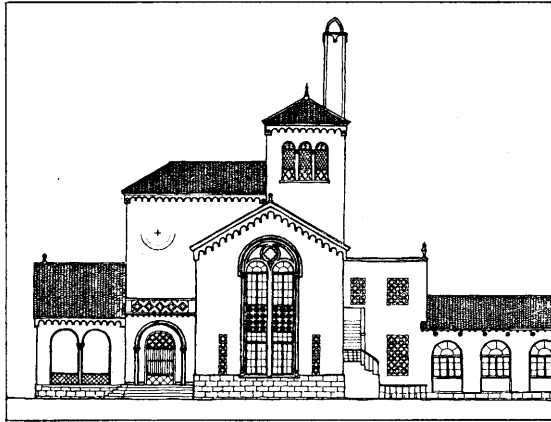
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第三四号

1986年12月—1987年12月

も く じ



随 想

随 想 樋口 謹一
建物の思い出 多田道太郎
人文科学研究所に滞在して 潘 吉星
京都の道路 アンヌ・マリ・クリスタン

講 演

夏期講座
日本領事報告と中国市場(杉本)／一九世紀の視覚——メアリ・フレイザーの明治日本(横山)／タルカ・因明・ロゴス——インド論理学はいかに翻訳されたか(赤松)／名匠の末期——『三國史』華佗伝を読む(山田)／デカダンスという言葉を巡って(鈴木)／「夕日」と文学——フランス近代を中心に(宇佐美)

開所記念講演

顧炎武の学問とその生涯(井上)／統計学と社会秩序——D・F・ドナンの社会観を中心にして(富永)／議会の開設(飛鳥井)

退官記念講演

同時代としての中国 竹内 実

共同研究の話題

現況報告 松本 俊郎
長生きということ 村上 嘉実
パノプティコンの教えるもの 浅田 彰

旅

カシミールの聖地あるき 井狩 弥介
アメリカのユダヤ人 甚野 尚志
羅浮山紀行 麥谷 邦夫

書いたもの一覧

おくりもの(22)・計報(22)・人のうごき(22)・外国人研究者・招へい外国人学者・外国人研修員・文部省内地研究員(23)・東洋学文献センター講習会(24)・講演会(25)・お客様(26)

随 想

樋 口 謹 一

夏から秋へかけて病院暮らし三月、その後、体だけでなく心の、頭のリハビリ中に迎えた師走に、そのセワシさを倍増せようと「随想」をものせよとお達し。ネクラの文章しかできないから、と断ろうとしたら、退官する身の務めである、と申し渡されては、もうどうしようもない。

転んでもタダでは起きない、リハビリに一役買わそう、と身の程知らぬ望みを抱いた。折から、桑原武夫先生との「近代化とナショナリズム」についての対談が迫っていたからである。

というのは、一年ほど前から頭の隅にこびりついていたことがあるのだ。かの胡耀邦失脚の一因たる中国学生運動の主張に、「恩賜の民主主義」反対が含まれており、中江兆民の『三酔人経綸問答』での余りにも有名な提言を私に想起させていた。

今年一九八七年は、現在の日本をなおその射程内におさめている、あの名著が公けにされてちょうど百年。その年の瀬に、あの運動についての資料に接した（『中央公論』一九八八年一月号）。



例を一つだけ挙げよう。「民主的権利は恩賜によって得られるものではない。恩賜によって与えられた権利は人様から取り上げられてしまう。自分で戦って得た民主主義こそが頼りになるのである」(中国科学技術大学大学院学生の大字報)。

兆民いうところの「恩賜の民権」ヴァーサス「回復(進取)の民権」にまさに照応しよう。中国人学生たちが『三酔人』を読んでいたか、それとも偶然の一致か、今は問わない。

たしか中岡哲郎さんは、工業化について中国が現在の日本ではなく、明治の日本にこそ学ぶべきだ、と指摘していた。これは、近代化の他の一面たる民主化についても妥当しはしないか。

問題がないわけではない。兆民によると、二つの民権の違いは、「質」の差ではなく、「量」の差で、だからこそ恩賜の民権を「道徳」という霊気、学問という滋養液で養ってやるならば、……かの回復の民権と肩を並べるようになる」からだ。

日本の旧憲法についてはともあれ、現憲法についてこの兆民説は妥当するか。いや妥当させねばなるまいし、これから中国は何を学び得るか。手放しの随想はホコロビを見せそうだ。この辺で筆をとめよう。



建物の思い出

多田道太郎

一九四八年春、人文研分館の門をくぐった。ただし「門」はなかった。今の図書館前に木造二階建の小さな建物があり、その入口を入っただけである。無給研究生の試験を受けるためである。建物の二階、突きあたったところに、助教授の合部屋があり、そこで鶴見助教授から英語の試験を受けた。ドアをあけると衝突があり、真ん中の大鏡が二十四歳の私を大きく写し出した。

その年の十二月、助手に採用になり、助手三人の大部屋が与えられた。今の時計台の、道路をへだてて西側にある赤レンガの古風な建物だった。油の染んだ木造の廊下を軋ませながら二階へのぼる。隣りの部屋は学生新聞の編集室で、賑やかな声が出ている。人文研分館（日本部、西洋部）の、さらにもう一つの分館、分室である。

この分館から分館へ、行ったり来たりするのが日課となった。分館の一階の入った左手が診療所の待合室めいたところで、ここで昼間、本山助手と将棋をさして桑原教授に叱られた。





人文研「分分館」(現在は学生部が使用)

全所の会合があると、北白川の白亜の殿堂へ出かけた。スペイン僧院ふうの回廊の石畳を踏んで、はじめてアカデミズムを実感した。

分館も分分館も今は亡い。白亜の学僧院のみが健在である。



人文科学研究所に滞在して

潘 吉 星

私は、山田慶兒先生の推薦を受け、竹内実前所長、尾崎雄二郎現所長の招聘に応じて、今年の五月から七カ月間にわたって日本に滞在して研究する機会を得たことを、光栄にまたうれしく思います。現在、私を客員教授として任命した西島安則総長の署名のある契約書の期限も切れ、私の研究も終了し、満ち足りた気持ちで京都大学と人文科学研究所を去ろうとしています。滞在期間を通じて、毎週行われた、山田先生が主催する「中国古代の科学」と、横山俊夫先生が主催する「一九世紀の文明史的研究」に出席し、多くの収穫を得ました。各地の異なった分野の研究者が一同に会し、専門の問題について集団で討論が進められました。これはすぐれた研究方法であり、学際交流を助け、集団の知恵を発揮して、一人だけの個人研究の限界を越えることができ、我々も見習うに値すると思います。このほか、藪内清先生の傘寿をお祝いするために山田先生が開催した「中国科学史国際会議Ⅱ一九八七京都シンポジウム」にも出席し、会議は大きな成功をおさめました。

私の人文研における研究課題は日中科学交流史でした。医学



の分野に重点を置き、おもに江戸時代に日本に渡った中国人医師である周岐来・朱来章・陳振声等の人々の事跡・著作および日本の医学界との交流について一層研究を深め、彼らの得難い原著を手にすることができました。周岐来についての最初の研究成果は、すでに共同研究班と中国科学史国際会議において発表しました。その他の課題については今後の研究を待たねばなりません。また『大和本草』と『本草綱目』についての比較研究もおこない、あわせて中国と日本、中国と西洋の交流史に關しても豊富な資料を収集しました。私の日本語を読み話す能力も以前より向上しました。これらはすべて私の今後の研究にとって、たいへん重要な意義をもつことでしょう。

今回の滞在では、藪内先生と吉田光邦先生から励ましと御教示をいただき、終始所内の山田先生、横山先生、田中淡先生、新井晋司君および共同研究班に参加しておられるその他の新旧の友人から援助を受け、面倒をみていただきました。人文研の事務局と国際交流会館は、私のために研究と生活のためのすばらしい環境を用意してくださいました。また文部省からは滞在費用の提供を受けました。ここに謹んで謝意を表します。今回の訪問は日中両国の学者間の友好と相互理解をいっそう深め、私自身にとりましても多大な収穫がありました。人文科学研究所と中国科学院自然科学史研究所の友好が日増しに深まることを願ってやみません。

(新井晋司訳)



京都の道路

アンヌ・マリ・クリスタン

日本文化に固有の習慣で、フランスから来たものにもよく知られそれに対して心構えのできていることは少なくないが、ささいなことではあるけれどもあつけにとられずにはいられない習慣がひとつある。日本人が道路を渡るその仕方である。所定の横断歩道に全員が集結するばかりか、明らかに自動車の姿など見えないときですら、車道の信号が赤に変わるのをしんぼうよく待っているのだ。西洋人には馬鹿げたことに思われる。けれどもそれ以上に馬鹿げたことがある。日本に来て数週間たったころ、私もまた同じようにし始めていることに気がついたのだが、それはたぶん疲労のせいだったのだろう。というのは、やはり私には思いもかけなかったことであるが、その数週間というものの歩道で自転車避けることに苦勞し続けていたからである。悪魔のような二輪車を逃れて、横断する前に一息いれる楽しみを、私は知ったのだった。

けれども問題はこれにとどまらない。私はその楽しみを、とりわけ束の間の無言の横断仲間たちとの奇妙な默契として、深



く味わたったのだ。私が彼らと同じように振る舞ったのは、何かよく意味が判らないまま、お互いにそうする以外に仕方がなかったからである。確かにその默契は、共有された諦めの気持ちに多くを依存していた。道路の横断は、日本、とくに京都においては、長期にわたって抵抗し続けることがほとんど不可能であるほどに、過剰なまでのさまざまな警告によって規制されている。信号は、車と歩行者双方のため規則たたく重複して設置されており、その位置は見逃すことが不可能であるほどに適切である。横断歩道の長く平たく引き延ばされた標識文字は、つねに新しくペンキが塗り変えられている。視覚障害者の安全を保証する機械じかけのかっこう鳥は、甲高い声で注意を喚起する。

以上は車道に関してであって、この話にはまだ先がある。自転車にいらだった歩行者は、それを路傍に避けようとして「歩道を保護する」目的で設置された柵にぶつかってしまう。さもなければ、その柵の途切れた隙間からかうじておおあわてで逃れようとして、「防護柵の不在を告げる」黄色い帯状のプロックにつまずいて、確実に足をくじくことになる。このような執拗なまでに過剰な保護とその実施のされ方の一貫性のなさに私は驚かされいらだたせられたのだが、おそらく京都を初めて訪れる私の同国人の大半はこれと同じ経験をさせられるだろうと思う。



しかし時がたつにつれて、私はこれらを受け入れる（当然そうしなければならぬのだが）ようになってきたばかりか、自分でもよく判らないままに、すこしづつ「理解し」始めたようなのである。というのは、私はこの制約の多い歩行を、他の所すなわち京都市内およびその郊外のあちこちでも経験したからである。自国の文化とは異質のその価値を充分に理解することはできないながらも、私はしかしそれをほとんど儀礼的なやり方でたっぷりと体験したのだ。神社にいたる山道のごつごつとした石、聖域を縁取る綱あるいは木の柵、回り道、象徴的な橋――、何世紀も前の庭園に生気を吹き込んだこのような遠い記憶が、都会の道路にまで刻み込まれているのではないだろうか。私たちが路上で冒す危険など、実際は取るに足りない。何よりも大切なことは、「他所」を通過する際に必要な礼儀作法をつねに尊重することなのだ。日本人の歩行者は、立ち止まることによって、各々の仕方でひそかに道路に敬意を表していた。私もまた彼らにならって同じように立ち止まったのである。

（宇佐美斉訳）



講演



夏 期 講 座 (昭和六二年度)

六二年八月一―三日
於 本 館 会 議 室

日本領事報告と中国市場

杉 本 俊 宏

戦前期、ことに明治期の日本資本主義経済の発達を考察するうえで中国市場の持つ意義は決して小さなものではない。この中国市場への輸出は、欧米へ向けた茶・生糸等の輸出と並んで、正貨獲得の重要な一翼を担い、生産財の欧米からの輸入を可能としていたのである。

中国市場への輸出品は、銅・石炭等の鉱産物を主体とした明治前期から、後期にかけて次第に綿関係製品へとその比重を移してゆくが、その間にあって所謂

「雑貨」という枠でくられた多種多様な製品が無視しえない比重をもって中国及び東南アジア地域へと流出していた。ここにとりあげるマッチはその代表的な商品であった。

日本におけるマッチの国内生産は、明治八年東京における旧金沢藩士清水誠の事業を嚆矢とするが、翌々十年にははやくも中国への輸出を開始し、同十三年以降輸入品を完全におさえて国内市場を掌握するとともに、これに踵を接して上海・香港を中心とした中国市場へ急速に進出してゆく。このマッチ輸出の主な担い手となったのは大阪・神戸の製造業者達である。それは生産に従事した都市下層住民の存在とともに、実際の輸出業務を担ってこれを主導した清商の存在が大きかった。マッチ等の雑貨輸出においては、その消費者の嗜好に左右されやすい性格の故に、消費市場に直接的に接触していた清商を抜きにしては、かくも急速な進展は成し得なかったのである。

こうした状況に対し、輸出奨励を標榜する政府は海外の領事館網を通じて市場の動向を調査し、通商政策の立案・施策の重要な参考材料とした。例えば、明治二十二年農商務省は外務省を通じて在外各地の領事に対してマッチの商況調査を依頼し、日本製マッチの商況・問題点や消費市場における今後の動向などを把握

しようとしていた。清商の存在によって消費市場との直接の接触を断たれていたマッチ製造業者（その多くは清商に金融的に従属する零細業者であった）にとってもこうした情報の必要性は高かった。

その多くが近代的大工業生産でなく、マニユファクチュアや問屋制家内工業生産の形態であった「雑貨」は、にもかかわらず欧米からの移植技術や消費市場との近接性などを武器として中国市場に進出した。日本領事報告はそれを推進する梃子のひとつであった。

一九世紀の視覚

——メアリー・フレイザー——

の明治日本——

横 山 俊 夫

一九世紀の技術と人間のかかわりということで気になるのは、写真の普及が人々のものの見方をかなり変えたのではないか、ということである。

もっとも、このような疑問は、二〇世紀のテレビの普及によるさまざまな文化変容を体験した者が、思い入れをこめて発しているだけのこともかもしれない。

検討の対象として、世紀のかわりめに英米の文壇にあったメアリー・フレイザーをとりあげた。その日本

滞任通信の刊行は、一八三九年にダゲレオタイプが出現して、「絵画は死せり」と画家ドラローシュを嘆かせてから六〇年目にあたり、また立体写真鏡で世界の景勝を居ながらに楽しむことが、ロンドンやパリの社交界に流行し始めて約四〇年後のことであった。

初代駐日英国公使のオールコックは、立体写真鏡の全盛期にあたる一八六〇年代初頭に日本論を展開していたが、「写真的精確」こそは、彼が筆をとる際に、もっともこだわったことであった。それは、真実は視覚をとおして認知できるはずだとする一八世紀後半以来の世俗思潮と、写真こそは視覚がとらえる像をもっとも忠実に定着しうる技術であるとの信念が融合したものであった。

ただ、写真に写らぬものは真実ならず、写真的精確をこころがけぬ文章の価値は低い、との意識は、人類史のなかではいささか特殊なものだったのかもしれない。それは、一九世紀の遠隔地紀行や異文化紹介のジャンルで、観察者が現地の言葉を解しない場合に、あるいは、観察の対象との心理的距離がはなはだしい場合に時としてあらわれただけの現象ではなかったか。

フレイザーの文章は、このような問いに答えるためのヒントを与えてくれる。イタリア・アメリカ・イギリスでの少女期と、外交官の妻としての、中国・オー

ストリー・チリにおける長期滞在を経たあとの彼女の視覚は、すでに立体写真鏡の狭い接眼レンズにたよるには、あまりにしなやかな焦点操作能力をもち、その文章は、あきらかに初期の写真術が人間精神にあたえたショックからの立ち直りを示すものであった。

フレイザーがその視界のなかにたえず求めていたものは、たんにくっきりした映像ということではなく、さまざまな光景に登場する生や死の美醜と、その背後にある目に見えぬ存在からの啓示であった。これは、明治の元勳たちの家族を観察する時であれ、熱海の大波や日光の古杉と対面する時であれ、公使館で働く日本人の料理人や女中たちの日々の暮らしを覗く時であれ、閃光のごとく彼女の目に伝わる何かであった。そのような一瞬の感動を再現すべく、彼女は、光や色彩描写をふんだんにちりばめた文章を展開している。その文体を支えた視覚を、たんに彼女のカトリック信仰によるものと片付けることはむづかしい。写真術、印象派の光分析、あるいは当時の交通網の発達による異文化との直接の出会いの増加といった、十九世紀的なるものをぬきにしては、研ぎすまされようのなかった視覚をこそ、見てとるべきではないだろうか。

*

*

タルカ・因明・ロゴス

——インド論理学は

いかに翻訳されたか——

赤松明彦

玄奘入竺の時期は、インド思想界において認識論・論理学をめぐる議論が沸騰していた時期にあたる。特に仏教論理学においては、ディグナーガ（陳那）の權威はすでに確立し、ダルマキールティ（法称）による新たな展開をみた丁度その時であった。玄奘はディグナーガの『集量論』を熱心に学んでいる。ナーランダーにおいては二遍の講義を受け、他所においてもバラモン僧などから教えを受けている。だが不思議なことに玄奘は『集量論』を漢訳しなかった。かれが翻訳した論理学（因明）書は、『因明正理門論』と『因明入正理論』の二書のみである。前者はディグナーガの初期の著作、後者は当時の仏教論理学の初級入門書である。かれの翻訳は横のものを縦にただけといってよいほどの直訳である。サンスクリット原文と対照すれば、それが大変正確なものであることが解る。ではこうして中国語の文脈へと移し替えられた論理学はどのように読まれることになったか。『因明入正理論』に

対する注釈書は、慈恩大師基の『大疏』を代表として、わが国秋篠寺善珠の『明燈抄』、江戸の鳳潭の『瑞源記』など数多い。かれらの興味は多く論証式の過失を枚挙することに向けられる。最も基本的な論理法則については、基以来の誤読を引きずったままである。

「誤読」といって非難するつもりはない。文化の翻訳はすべからず誤読を含むにちがひなからうから。

誤読の一例。玄奘訳「顕因同品決定有性」。サンスクリット原文に従って読めば、「因（論理的理由）が同品に決定（かならず）有るという性（こと）を顕す」となる。しかし、基はこれを「因同品の決定有性を顕す」と読む。インド論理学においては、因同品に対応する概念はない。基は、「因同品」という集合と「宗同品」という集合の交わる共通部分において成立する事象が論理的關係を保証すると理解したようである。一般的な論理理解としてこれは決して間違っているとはいえない。それゆえ、近年沈劍英が『因明学研究』において、この基の考えを評価したこともまた納得できる。だがすでに呂澂や熊十力が指摘するように、これが玄奘訳の誤読であることも明らかである。しかし果してこれは基の単純な誤解にもとづくものであったのだろうか。あるいは意図的な読み替えであったのかかもしれない。「因明学」が法相宗内部の秘儀にとどま

ることなく、広く中国思想界に開かれたものとなっていたら、あるいはこの基の誤読は中国論理学の新たな展開点となりえていたかもしれないのであつたのである。

名 医 の 末 期

——『三国志』華佗伝を読む——

山 田 慶 兒

はじめて麻酔による乳癌の手術をおこなったひととして世界外科学史に記される華岡青洲の医学は、漢蘭折衷学派のそれであり、外科手術の技法は蘭方であつたが、麻酔薬は漢方に改良を加えたものであつた。とりわけわたしの興味をひくのは、青洲が麻酔を用いる手術の着想と成功への確信を、乱世の梟雄曹操に殺された魏の名医華佗から得ていたことだ。『三国志』によれば、華佗は「麻沸散」によって患者を麻酔し、開腹して腸を切断し、洗滌したのち縫合し、一か月で平復させたという。青洲はかれの工夫した麻酔薬を「麻沸湯」と名づけ、みずから華佗の再来をもって任じたのである。とはいえ、華佗の「麻沸散」と青洲の「麻沸湯」とのあいだには、なんの關係もなかった。「麻沸」とはもともと「沸騰」を意味し、「麻沸散」とはたんに沸騰処理をへた（薬散粉薬）の意にすぎない。そして、

『三国志』は藥物や製法についてはなにも語っていない。いっぽう、青洲の「麻沸湯」(煎じ藥)に使われているマンダラゲが鎮痛剤として用いられるようになったのは、中国では金・元代ごろからであるらしい。

それだけではない。外科の名手であったというのは、死後かれに帰せられた伝説ではなかったか、と思えるふしがあるのだ。『三国志』華佗伝には、十六例の診療の記載があるが、外科手術をおこなっているのは一例にすぎず、それもほかの記載例とちがい、まるで具体性がない。記載からみるかぎり、華佗がもつとも得意としたのは條虫の駆除であり、また死んだ胎児の処置であった。内科・産科の名医だったのであり、曹操の侍医となったのもその持病の激しい頭痛を治療するためにほかならぬ。しかし、動乱の世が求めていたのは、外科医であった。名医像は時代とともに変わる。三国時代は戦国時代について、外科医のなかに医師の理想像を求めた時代であった。

曹操に殺されたことも、華佗が時代を代表する名医となるため條件にかなっていた。古代の医師の要諦は、患者が助かるかどうかをすばやく診断し、助からない患者には手を下さないことである。華佗は曹操が助からぬとみて、妻の病氣にかこつけて故郷へ帰り、曹操の度重なる呼び出しにも応じなかった。そして曹操の

怒りをかったのである。曹操が華佗を殺したことを悔いたのは、愛子の病いのときであった。

デカダンスという

言葉を巡って

鈴木啓司

二〇世紀も末に近付くにつれ、世間ではちよつとした世紀末ブームを迎えている。そういった風潮の中で、「デカダンス」という言葉をしばしば耳にするようになった。この言葉あるいは概念は、今日の日本社会では、メリオラティブな意味をもって多く使われているようだ。いわく、^{デカダンス}頹廢の美学、^{デカダンス}華麗なる頹廢等々。これに対し、本国フランスに目を向けると、かなり違った状況が見受けられる。ここ数年フランスで刊行されたデカダンス関係の書目に目を通してみると、この語の使用例は、おおよそ二つの範疇に分類できる。第一は、文明論的視点から論じられたもので、その場合、デカダンスは、文明の危機を表わす、ペジョラティブな意味を伴った一般的概念である。第二は、文学史上のエチケツトとして使われたもので、この場合は、一九世紀末の特定の作家群およびその作品を指し、使用範囲は限定されている。

フランスにおけるこのような語法の背景には、思想上の伝統が横たわっている。ルネサンス以来、ヨーロッパでは、ボワロー、ボシュエ、モンテスキュー、ヴィーコ、ギボン、ニーチェなど、様々な思想家、歴史家が、デカダンスを論じてきたが、彼らの論法は、おおむね、この社会現象を文明的に下位の状態とみなし、忌避すべきもの、あるいは超克すべきものとして告発することにあつたといえよう。

しかし、一九世紀中葉より、従来のデカダンス観に変化の兆がみえ始める。それは主に文学の方面においてであつて、その嚆矢となつたのが、『悪の花』の詩人ボードレールであつた。彼のうちには、デカダンスというものに、古典美学の規範から逸脱する新しい美の形体をみようとする姿勢が窺える。この傾向はゴーチエに引き継がれ、やがて世紀末を迎えるとともに、いわゆるデカダンス文学として結実するというのが、文学史的な見方であるが、仔細に彼らのデカダンス観をみていくと、必ずしも全面的に「デカダンス」なるものを肯定し受け入れているのではないことがわかる。そこには、本来ペジョラティブな名称に対する否定的態度もみられ、この文学思潮を反正統といった二項対立的図式の中で解釈することを決して許さない、アンビヴァレントな本質が認められるのである。日本での

昨今のデカダンス・ブームには、この内的葛藤が欠落しているように思える。

「夕日」と文学

——フランス近代を中心に——

宇佐美 齊

太陽は東に昇り、天空に輝き、そして西に沈む。このはてしのない繰り返しは、古代の人間に永遠を夢みさせた。例えばケルト民族の古歌である『オシャン』の夕日讃歌は、このことをはっきりと示している。ここでは、沈みは昇りにつながり、昇りは沈みにつながる。このような無限の連鎖と繰り返しのうちに、古代人の夢と願望は豊かに育まれていった。彼らの夕日に寄せる思いは、ひとことで言えば、生・死・再生という無限反復ないし円環の構造に裏うちされているのだ。

これに対して、近代人が日没という自然現象をどのようにに観照し受けとめたかをフランス文学を通して考えてみようとするのが本講演の主旨であつた。最も顕著な転換点となつたのは、ロマン主義であつて、例えばシャトーブリアンは、彼の作中人物ルネが見つめる落日を「幾世紀にもわたって動き続けている時計の振り子」に譬え、ついでゴシック式の大聖堂の塔から聞こ

えてくる「時を告げる鐘の音」を喚起する。ここでは、もはや沈む日は、西方世界に休息し、やがて世界の裏側を通して東方に帰還するはずの、死と再生の象徴ではない。滅びに向かってまっしぐらに突き進む直線的な時間意識のみが、あらわに示されているのだ。ルネは、日没と同時に時を告げる教会の鐘の音からただちに死を思い、その死を悼んで人々の流す涙に思いをいたすのであるが、ここから「時が命を食らう」というボードレールの時間意識は、すでにきわめて近くにあると言っている。

事実ボードレールの韻文詩や散文詩には、「夕日」のイメージが頻出する。そこには、「悶え死につつある太陽」の瞬間の輝きに蘇りの幻影を見ようとする陶酔の詩学がうかがわれると同時に、いわば沈みに固執することによって近代の矛盾を生き抜こうとするデカダン精神が、横溢している。

フローベールの『ボヴァリー夫人』にも、「夕日」のイメージが氾濫している。それらは、(1)時間の推移を鋭く意識させ、ひとを追憶あるいは夢想へと誘なう、(2)人物の悲痛、倦怠、憂愁あるいは幻滅の悲哀を強調する、(3)人物の没落、死、滅亡をいるどる、(4)生命の燃焼あるいは束の間の官能の悦びを暗示する、などの役割をはたしている。この小説において

「夕日」は、人物の内面を照射する象徴体系として機能しているのだ。

近代社会における時間の制度化と物象化は、古代人の反復と円環の観念を完膚なきまでに破砕した。このような「直線的な時間」の強迫観念とそれに向いする反逆の叫びとが、ロマン主義を転換点として、文学の主要なテーマとして浮上してくる。特に、出生年(一八二一年)と代表作の発表年(一八五七年)とが符合する上記二人の作家の作品が、この点を最も鮮明に浮き彫りにしている事実は、注目に値する。

開所記念講演(昭和六二年度)

六二年一月五日
於 本館会議室

顧炎武の学問とその生涯

井 上 進

清代の学術を一言で蔽えば考証学であり、その考証学の開祖と言えば、誰でも顧炎武を推す。これはもう揺ぎない定説、と言うよりもはや厳然たる事実と認められている。だが考証学の意味、その様なものが生みだされてくる所以となると仲々やかいかい、誰もが納

得できる定論というものは無い様に思われる。

顧炎武の學問は明末まで盛行した思辨的道德哲學とは異なり、こゝろではなく、ことばに偏つたものであった。彼が提唱したのは知識と行為の問題であり、道德の「内」に対応させれば「外」に務めるものといえる。「外」なることとことばの立場から見ると、すぐれて義にかかわり、道德的価値を體現している經書すら、一つの書籍として取り扱ひうる様になる。顧炎武は詩經を「古人の韻譜」として研究したし、更に經書一般についても、これを「史」として見ることを述べている。専らこととことばに對し徹に入り細を穿つた研究を行ない、その一方で「六經皆史」説を生みだした清代考証學の開祖として、顧炎武を推すことは全く正当なのである。だが、なぜその様に「外」に關心を集中することが許されるのであろうか。顧炎武にとって「内」とは常に緊張状態を維持せねばならぬ様なものではなかった。彼はその經世論文において人々の私や情、強く言えば「人欲」、の存在を當然のものと見なしている。彼にとって、心は「天理」と「人欲」が争う決戦場などではなく、そのままでさしたる問題のないものなのであった。自己は信賴するに足るのであつて、他の權威によりかかる必要などないのである。この様に見てくると、顧炎武の學問には、その深部

において陽明學と連続するものがあると考えざるをえない。しかるに彼自身の言によれば、陽明學こそは明の滅亡を招いた元兇、誤れる學術の最たるものであった。彼は秩序の維持、体制の安定を求めたが、そのイデオロギーとして朱子學に代わるものを考えることなど到底できなかった。かくして彼は朱子を稱賛し、これに違ふものを排撃するのである。彼があくまで明の遺民としての生涯を貫く一方、清朝の權貴たちとしきりに交際し、頗る親しい關係をもつたことも、その學問がもつ問題と表裏をなしているよう。

統計學と社會秩序

——D・F・ドナンの

社會觀を中心にして

富 永 茂 樹

一八世紀末から一九世紀初頭にかけて、フランスの社會は大きな転換點にさしかかる。言うまでもなく、それはまず大革命によつてもたらされたものであつたが、より長期的な視野で見ると、工業化の進展にともない伝統的な中間集團が衰退して、これに変わるあらたな社會編成のかたちが摸索される時期でもあつたのである。他方でこの時代には、一八世紀以來進め

られていた自然科学の社会科学への応用の必要がいつそう明確に認識されるとともに、かつての『百科全書』に象徴される知識の網羅的な集積から、これを全体として統合することが構想されはじめる。こうして諸科学は多くの領域において、社会秩序の問題と深くかわるることになるのである。

この科学と社会の再編成過程とのかかわり——そこからどのような結果が引き出されたかは別にして、少なくとも秩序の問題を考えるうえで科学に寄せられた大きな期待——を如実に示すもののひとつが統計学である。数学の社会科学への応用は、一七世紀のパスカルによる確率計算の整備以来、ペティの政治算術をはじめとしてさまざまなかたちでなされて、一八世紀末のコンドルセの社会数学においてひとつの頂点に達するが、現実のうえでも、一九世紀の初めには内務省に統計局が設置され、第一回の国勢調査が実施されることになる。このような動きのなかにおいて、英・独の統計学の書物を翻訳しみずからも『統計学基礎理論』を著して、さらに統計学協会の設立にも関与したのがD・F・ドナンであった。

大革命を熱狂と誇張が支配する混乱の時期にとらえ、その背景に啓蒙主義の抽象的理念の存在を見てとるドナンは、社会は道徳上の病に陥っており、そこからの

回復のためには体験と検証、事実と計算にもとづいた科学が必要であると考えた。この科学こそ統計学にほかならない。ドナンの統計学は、実際には各国の国情の記述および比較を主たる内容とするにとどまり、当然ながら今日のそれにはまだ距離を残しているが、しかし統計学が行政（とりわけ徴兵制度と税制）や外交にとつてきわめて有用な知識の体系として大きな期待を担うものであったことは、そのテキストから充分に読み取れる。この統計学を介しての知識と秩序の結合は、当時の社会でかなり広く共有されたものであり、またその後一九世紀をつうじて拡大的に受け継がれてゆくことになるのである。

議会の開設

飛鳥井 雅道

一八九〇年（明治二三）の帝国議会開設から、まもなく一〇〇年をむかえようとしており、本会議議事速記録ばかりか、委員会議事録まで復刻出版がすすんでいるにもかかわらず、その実態、その意味の検討はきわめてたちおくれている。第二次大戦直前に『国家学会雑誌』を中心に研究の進展はあり、戦後では一九六

○年前後に議会民主主義の実態という観点から検討がおこなわれかけたものの、議論はとまったままになっている。

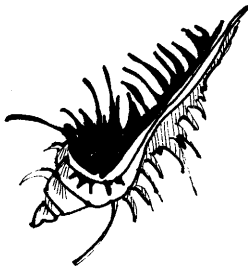
しかし、当時の一般的理解では、議会開設によって初めて憲法が実施に移されると考えられており、この理解は官民、ひいては吏党・民党を通じて共通した認識だった。そしてそもそも自由民権運動の政治的目標が「国会開設」を中心としたものであったのだから、この実現の年たる一八九〇年は、民権運動の成果が総体的にとわれる年でもあったはずである。

しかし民権派は一八八〇年の運動のなかで、ほぼ全能力をつかいはたしていた。一八八一年の自由党結党を支えた各地域の地主層は松方デフレを経過するなかで層としては両極に分解してゆき、統一した政治目標を失いつつあった。自由党自体もすでに解党していた。改進黨も活動を停止していた。地租軽減の要求も分明ではなくなり、地租の基礎となる地価が地域によって不公正であるといった地域利害が旧政党员のなかにも強く意識されはじめていた。

民権運動解体に成功し、憲法その他一連の法体制を整備するのに着々と手をうってきた政府は、国会開設によって、権力の基盤をより強固なものにしようとしていた。一方、民党は、一〇年来の目標だった国会に

おいて自分たちの失われかけた立脚点を再建しようとした。第一回総選挙の結果が民党一七〇にたいし、吏党一三〇という数だったことは、奇妙な結果をもたらした。政府は議会内少数派としてヘゲモニーを失ったものの、民党も自由党再建過程での紛争がしめすように、派閥間の、また各地域の利害を統合できず、政治的理念をしめすことができなかった。もたれあい、理論的根拠のない拒否の応酬が議会を支配し、混乱がつづいた。

第一議会の無惨な非生産性は、明治中期政治史の憂鬱な幕あけを象徴していたのである。



退官記念講演

六二年三月一九日
於 本館會議室

同時代としての中国

竹 内 実

ふりかえると、同時代としての中国を対象としてきたといえます。ここ数年の中国は、「転形期」にありました。なぜ転形期といって転換期といわないかというと、方向は定まっているとしても、確実ではないからであります。

それをくりかえしてきました。ひらたくいえば、左右にゆれてきました。その周期は二年半でありましたが、ややゆるやかにくぎれば五年、あるいは二十年、さらには四十年の周期とみることができましよう。

ゆれを生じた原因として、権力観と権力構造をあげることが出来ます。権力観では、あきらかに異なります。わが島国では、権力とは一本の旗竿（国旗掲揚塔の旗竿）であって、これをつかんだ人間だけが権力にあずかるわけですが、中国大陸においては、学校の校庭にいくつものころがっているポールであって、誰でも拾うことができ、拾ったかぎりではたとえ一個であっ

ても、二個、二十個拾った人間と争うことができます。権力構造では、漢の高祖劉邦と蕭何の關係にみられるように皇帝型権力と宰相型権力の相互補完と対立、そして前者の絶対的な優位性があります。皇帝の権力も権威も、宰相が政治をうけおってそれを支えているわけですが、立場上、宰相は民衆に接し、しだいに人氣を与える。すると、皇帝は嫉妬してこれを殺す。蕭何の細心の注意は、フランスの大蔵大臣、フーケにはなかったものです。これを現代にあてはめることは、あまりにもなまましいので避けますが、いわずともおわかりであります。

さらに、外戚型権力の介入をみるべきであり、これは一九八七年一月十六日の政治局拡大会議にたいする中央顧問委員会の参加を事例としてあげることが出来ます。数のうえで、当日の会議を決定的にしており、雰囲気をつくりだしたと想像できます。顧問委員会は、もともとは停年退職者の花道であったはずですが、

この拡大会議で胡耀邦が総書記の職を辞任しましたが、それは彼の「失誤」のためであると公表され、「錯誤」というきびしい表現ではありません。微妙です。中国の事情を判断するには文献に頼り、その文体をてがかりとしてきました。古代史と現代史をくみあわせてみるべきでありましよう。配布のプリントのユーモア漫画は、政治がすべてではないとの意味です。

*

*

おくりもの

。一九八六年度の財団法人人文科学研究協会助成金は、竹内教授の推薦により、南開大学教授（中文信息研究室主任）李約瑟氏におくられた。

。桑原武夫名誉教授は、文化勲章を受章。

。吉田光邦名誉教授は、紫綬褒章を受章。

（以上一一月三日付）

。上山春平名誉教授は、京都新聞文化賞を受賞。（一一月二〇日付）

計報

。貝塚茂樹名誉教授（八二才）は、二月九日、逝去。従三位勲一等瑞宝章がおくられた。

人のうごき

。竹内 実教授（東方部）は、停年退官（三月三十一日付）、京都大学名誉教授に（四月一日付）。

。尾崎雄二郎教授（東方部）は、当研究所長に就任、附属東洋学文献センター長を

併任。

。谷口規矩雄大阪大学教養部教授は、当研究所教授（比較文化研究部門）を併任。

。井上輝夫慶応義塾大学経済学部助教授は、非常勤講師に、（比較文化研究部門助教授、八五年四月一日）八八年三月三十一日）。

。天野史郎講師（西洋部）は、辞職（三月三十一日付）、明治学院大学国際学部助教授に転出。

。宮寄法子助手（東方部）は、三重大学人文学部助教授に昇任（三月三十一日付）。

。新保敦子氏を助手（附属東洋学文献センター）に採用。

。鈴木啓司氏を助手（西洋部）に採用（以上四月一日付）。

。井上章一助手（日本部）は、国際日本文化研究センター助教授に昇任（五月二二日付）。

。河野道房氏を助手（東方部）に採用（六月一日付）。

。山本有造助教授（日本部）は、教授に昇任。

。赤松明彦助手（東方部）は、九州大学文学部助教授に昇任（以上一一月一日付）。

。麥谷邦夫助教授（東方部）は、二月一六

日伊丹発、中国社会科学院世界宗教研究所、四川大学宗教研究所、武当山道教協会、湖南省中医学院等で、三教交渉の思想的の研究を終え、一二月一四日帰国。

。山田慶兒教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金（海外学術調査）により、二月二七日伊丹発、中国社会科学院日本研究所、北京大学、吉林大学、南開大学等で中国地域における日本研究情報の流通に関する調査を終え、三月一〇日帰国。

。林 已奈夫教授（東方部）は、四月五日伊丹発、台北故宮博物院で中国古代玉器の研究を終え、同月一二日帰国。

。浅田 彰助手（西洋部）は、四月八日成田発、マサチューセッツ工科大学でアジア学会及びポストモダンリズム・ワークショップに参加し、シカゴ大学、コーネル大学で資料収集を終え、同月二二日帰国。

。田中 淡助教授（東方部）は、昭和六二年度文部省科学研究費補助金（海外学術調査）により、四月二八日成田発、邯鄲市文物研究所、北魏洛陽城、鄭州等で中国都市の比較史的調査を終え、五月二八日帰国。

。小南一郎助教授（東方部）は、五月四日

伊丹 堯、中国社会科学院文学研究所、四川大学歴史系、山東大学中文系等で中国古典小説と民間文芸の關係について研究を終え、一二月一日帰国。

吉川 忠夫教授（東洋部）は、五月一八日伊丹 堯、北京大学歴史系、湖北省社会科学院等で六朝時代の政治と文化における地域社会の役割についての研究を終え、六月八日帰国。

多田 道太郎教授（西洋部）は、六月九日伊丹 堯、プラハ、ブタペスト、フランクフルト、ロンドン市等で世界の歴史都市の現状と課題に関する調査・研究を終え、同月二四日帰国。

谷 泰教授（西洋部）は、文部省科学研究費補助金（海外学術調査）により、六月一五日伊丹 堯、スリナガル、ファルガム周辺等でインド亜大陸における雑穀栽培とそれをめぐる農牧複合の研究調査を終え、九月一五日帰国。

前川 和也助教授（西洋部）は、六月二九日伊丹 堯、オランダ近東研究所でシュメール農業研究グループ研究集会に参加し、ロンドン大英博物館でシュメール農業に関する研究調査、イスタンブール考古博

物館で楔形文書の研究を終え、八月二八日帰国。

桑山 正進教授（東洋部）は、七月一日成田 堯、イタリア中東極東研究所でガンダーラ彫刻の資料収集、ベネチアで開催された第九回南アジア考古学会に出席し、ローマの国立東洋美術館でガンダーラ彫刻の資料収集を終え、同月一五日帰国。

村田 裕子助手（東洋部）は、七月一八日伊丹 堯、黒龍江大学、吉林大学等で東北陷落期文学に関する資料収集を終え、八月五日帰国。

井狩 弥介助教授（西洋部）は、文部省科学研究費補助金（海外学術調査）により、八月一二日成田 堯、カトマンズ市内各所でヒンドゥー寺院儀礼調査、スリナガル、カングラ、アメダバード等でガンジス河流域の複合文化形成動因の比較研究を終え、一〇月一四日帰国。

山室 信一助教授（日本部）は、八月一七日成田 堯、ハーバード大学イェンチン研究所で、客員研究員として比較日米政治思想史研究に従事、一九八八年八月一日帰国予定。

桑山 正進教授（東洋部）は、一〇月一九

日成田 堯、カラチ博物館でガンダーラ彫刻に関する資料収集、ラホール博物館でクシャーナ朝に関する資料収集、アフガニスタン科学アカデミー・クシャーナ研究国際センターで開催されたクシャーナ期における文化思想に関する第六回国際セミナーに出席し、一月二七日帰国。

田中 淡助教授（東洋部）は、一〇月二〇日伊丹 堯、杭州の靈隱寺他各所、蘇州の環秀山莊他各所で古建筑及び庭園調査、南京工学院建築系創立六〇周年記念大会に出席し、同月三〇日に帰国。

梅原 郁教授（東洋部）は、十一月二三日伊丹 堯、泉州市貿易局開設九〇〇周年記念シンポジウムに出席し、天妃碑、宋慈墓、龍泉窯等各所で史跡の調査を終え、十二月五日帰国。

細川 弘明助手（西洋部）は、一二月五日成田 堯、オーストラリア国立大学太平洋地域研究所でオーストラリア北西海岸地方の言語社会学的研究をし、一九八三年三月四日帰国予定。

外国人研究員

王 学莊 中国社会科学院近代史研究所

副研究員

中国国民革命の研究

受入教官 狭間教授

期間 一九八七年一月～同年六月

・Anne-Marie Christin パリ第七大学教授

テキストとイメージの相關関係の研究
受入教官 宇佐美助教

期間 一九八七年七月～一九八八年一
月

・潘 吉星 中国科学院自然科学史研究所
教授

日中科学交流史の研究

受入教官 山田教授

期間 一九八七年五月～同年十二月

招へい外国人学者

・Gavan McCormack ラ・トロープ大学

歴史学部助教授

一九三〇年代の日本政治史の研究

受入教官 古屋教授

期間 一九八七年一月～同年六月

・夏 剛 中国社会科学院外国文学研究所
所助理研究員

日本の戦後文学と文革後の中国文学の
比較研究

受入教官 荒井教授

期間 一九八七年六月～一九八八年六
月

外国人研修員

・Magnus Kriegeskorte ボン大学院生

近代日中交渉史 指導教官 狭間教授

期間 一九八七年四月～一九八八年三
月

・Evelyne Mesnil パリ第七大学院生

蜀国宗教絵画の研究

指導教官 荒井教授

期間 一九八七年四月～一九八八年三
月

・Marguerite Wells オックスフォード大
学院生

新劇における笑い

指導教官 横山助教授

期間 一九八七年九月～一九八八年九
月

・Richard Piorunski フランス国立東洋
言語文明研究所院生

新情報システムの社会受容にかゝる
社会・文化的背景

指導教官 谷 教授

期間 一九八七年一〇月～一九八八年
九月

・Syke Schermann ハイデルベルク大
学院生

淮水流域の文化発展と春秋時代の諸地
域文化相互の交流関係

指導教官 林 教授

期間 一九八七年一〇月～一九八八年
九月

文部省内地研究員

・持井康孝 金沢大学文学部助教授

中国古代青銅器文化の研究

期間 一九八七年九月～一九八八年二
月

東洋学文献センター講習会

・一九八七年度漢籍担当職員講習会（漢籍
電算処理）

第一日（一一月九日）

漢字のデータベース(講演)(京大大)

型計算機センター教授(星野 聰)

東洋学文献類目の編纂とフォーマット

(講義)

都築 澄子

コード系の諸問題(講義) 勝村 哲也

東洋学文献類目の計算機処理(1)

(京大大型計算機センター技官)

河野 典

第二日(十一月一〇日)

ALA文字と東南アジア言語処理(講

義)(帝国女子短大助教授)

桶谷猪久夫

漢字とJIS外字の処理(講義)

桶谷猪久夫

東洋学文献類目の計算機処理(2)

(京大大型計算機センター技官)

村尾 義和

データベース検索(1)(実習)

第三日(十一月一日)

計算機入門(講義)(京大大型計算機

センター助教授)

島崎 真昭

データベース検索(2)(実習)

第四日(十一月二日)

エキスパートシステムと情報検索(講

義)(京大大型計算機センター助手)

大西 淳

大学間・図書館間ネットワーク(講義)

(京大大型計算機センター講師)

飯田 記子

学内ネットワーク(講義)(京大大型

計算機センター助教授) 金沢 正憲

データベース検索(3)(実習)

第五日(十一月三日)

附属図書館見学

大型計算機センター見学

東洋学文献類目と漢籍目録の電算化

(講義)

勝村 哲也

質疑応答

。一九八七年度漢籍担当職員講習会(中級)

第一日(十一月一六日)

中国の書物

経部書(講義実習)

第二日(十一月一七日)

史部書(講義実習)

子部書(講義実習)

第三日(十一月一八日)

集部書(講義実習)

附属図書館見学

第四日(十一月一九日)

最近に於ける中国の出版事情(東方書

店大阪営業所長)

竹部 肇

朝鮮本(講義実習)

(富山大学人文学

部助教授)

藤本 幸夫

第五日(十一月二〇日)

目録法(講義実習)(滋賀大学教育学

部助教授)

井波 陵一

第六日(十一月二一日)

質疑応答

講演会

。一九八七年三月一三日 於関西日仏学館

稲畑ホール

空間の象徴人類学 La Symbolique de

l'espace フランス社会科学高等研究院

院長 Marc Augé

通訳 京都大学文学部助手

共催 人文研・関西日仏学館 大浦 康介



お 客 様

一月二三日 復旦大学歴史系教授

三月一三日 中国芸術研究院副院長

フランス社会科学高等研究院院長

マルク・オージェ

四月四日 浙江省社会科学院哲学研究所所长

同助理研究員

四月二〇日 パリ第一大学教授

四月三日 ハイデルベルク大学学長

ギスバート・ツィ・プトリッツ

五月二三日 中国社会科学院経済研究所代表团

副研究員

章 良 猷
朱 家 楨

助理研究員

喬 桐 封
孫 新

五月二五日 北京大学歴史系教授

五月二七日 北京大学歴史系教授

中国文联所属中国民間文芸協会研究部

副研究員

六月一七日

「中国社会科学」雑誌副総編輯長

同編輯室主任

同右

外事局亜非処

王 汝 瀾
丁 磐 石
李 克 敬
阮 芳 紀
孫 新

六月二三日 パーデュー大学(米)教授

同右

七月一〇日 香港浸会学院講師

七月一七日 東呉大学教授

九月七日 中共中央文献研究室教授

同右 副教授

中共中央党史研究室教授

十一月二日 南京大学歴史系教授

十一月二日 中山大学歴史系教授

同歴史研究所副研究員

同歴史研究所副研究員

二月四日

二月七日

遼寧師範大学中文系教授

同右 副教授

レオナード・ゴードン

シドニー・チャン

林 啓彦

林 嘉誠

逢 先知

汪 裕 堯

王 淇

陳 得 芝

陳 錫 棋

張 磊

方 式 光

ミシエル・ペロー

李 世 剛

盧 文 暉



現況報告

「満州国」の研究班

本班は一年近くの準備期間をおいて八七年四月に発足した。「満州国」については近年、日本、中国の双方で多数の論文、著書が発表されてきているが、この傀儡国家の実態は意外なほどに分かっていない。「満州国」の研究は、基本資料の発掘や整備を含めて、これからの発展が期待される分野である。

私自身は植民地経済史が専門であるが、この班には法学や文学あるいは建築史といった私にとっては馴染みの薄い専門分野の研究者が参加していて、報告や議論の中で予想もしなかった問題を教えられ、また改めて資料を見なおさられるということも多い。

「満州国」には国籍法がなかったこと、国籍法の準備過程では傀儡性を隠すために日本人とロシア人を特別扱いにしてこれらを国籍付与の対象から外そうとする動きがあったこと、傀儡国家のもとにも東北文壇なる世界が作られて中国人が抵抗文学を発表していたこと、ヨーロッパ建築の前衛的な試み（アール・ヌーヴォー）がロシアによって大胆に導入されていた

こと等々は、この研究班を通して初めて気づくことのできた問題である。研究班は私の中国東北研究の視野を広げる上で、貴重な研究交流の場となっている。

ところで私の目に映る研究班の最大の魅力は、歴史資料についての豊富な情報と中国歴史学界そして中国との交流のパイプの太さである。

古屋哲夫氏、山本有造氏は資料の収集や整理をことのほか重視される研究者であるが、研究班にはこの他にも、植民地資料に関する専門ライブラリアンや歴史資料に詳しいメンバーが集まっており、貴重な情報を得ることができる。

また昨年には四名のメンバーがそれぞれ中国の学会へ参加しあるいは現地調査を行ってその成果を報告したが、こうした研究活動を通して班員のまわりには対中交流のパイプがかなり広がっている。中国側からの呼びかけもあって、今年の夏には研究班の有志で研究の成果を中国へ報告に行くことも検討されている。

私自身は当面、「満州国」に関する基本的な経済統計資料を整理して、既存のデータによっていかなる問題がどのような段階まで掌握できるのかを明確にするという課題に取り組む予定であるが、今後も研究班を大いに活用させていただくつもりである。

（松本 俊郎）

長生きということ

——中国科学史文献研究班——

さいきん厚生省が、新たに老人問題研究の総合機関をつくるという。昔から老人の世界を一番よく研究したのは、中国であろう。老人を廃残者として、そのための医療や社会問題を考える現代のやり方と異なり、老年を人生の理想郷とする中国の文化は、われわれに夢を与えてくれる。

ある教授が定年退官のとき、その友人の中国人から祝電がとどいた。さすがに中国では、第二の人生に花を持たせるのであろう。孔子は知命・耳順と進み、七十を越えて欲望と行動の全き自由を得た。その弟子たちとの交遊は、万人の仰ぐところである。朝に道を聞けば夕に死すとも可なりというのは、たとい不幸にして死んでもという意味である。莊周が妻の屍の前で、盆を叩いて歌ったというのは、死を謳歌したのではない。生死は気の聚散であるが、気そのものは永遠で、宇宙と一体となり天地と並び生ずというのが、彼の哲学である。正岡子規は、柩の前で弔辞などを読み、戒名や、空涙を流すは無用、談笑平生の如くあるべく候、

と言った。これも莊子流の死生観であろう。その短い生涯は、死の直前まで充実していた。

人文研の客員教授潘吉星氏は、氏が業を受けた化学史の先師たちが、ふしぎに皆長寿であったという。外国の学者には、老齢で気品の高い人が少くない。ニードム先生も昨年科学史班で、八十六歳のお祝いをした。老子は長生久視といい、列子は三楽といい、本草経は不老延年という。それはただ年齢の事実をいうのではない。事実と潜んでいる願望を表現しているのである。願望は事実を支配する。それは科学を育て技術を生む。願望は他面において、今日のシュレアリズムと同様、事実を越えて欲望の造形となる。中国の詩や水墨画は幻想に満ちている。神仙世界には夢がある。中国科学史国際会議で、西独のウンシュルト氏は、西欧が「あれかこれか」であるのに対し、中国は「あれもこれも」であると言った。思うに、「あれもこれも」は、事実の中に理が内在しているからであらう。華嚴でも理事無礙・事事無礙という。この理が欲望造形を出現する。即ち欲望を浄化して肯定する。中国の科学は、事実を通して理を追究する。実事求是の「是」も、莊子の「因是」（絶対）を意味するのではなからうか。

（村上 嘉実）

パノプティコンの

教えるもの

——知識と秩序班——

一七八七年ロシアを訪れたジュレミー・ベンサムは、旅先でパノプティコンと称する監獄のモデルを設計した。その建物は円形になっており、中央の監視塔から、円周上に整然と配置された独房を、一望のもとに監視することができ、たしかに、すべてを可視的空間の中で分類し配置するというこのプランの中には、観念や動機を一覧表に整理することから始めて膨大な法のコードを構築しようとしたベンサム流の思考様式、その意味できわめて一八世紀的な思考様式がよく表れており、彼がこれに熱中したのも当然だろう。けれども、たんに表を作ることと、それを装置として具体化することの間には、相当な隔りがある。しかも、その装置には、その装置の現実の機能を見かけとは大きく変えてしまうひとつの工夫が凝らされているのだ。

その工夫というのは、監視塔の窓に一種のブラインドをつけて、囚人から見られずに囚人を見ることを可能にする仕掛けである。囚人の方からいえば、この仕掛けのおかげで、実際に監視者がいてもいなくても、

常に匿名の監視の視線を感じずにはいられなくなるだろう。やがて囚人はその視線を内面化し、自分で自分を監視するようになるだろう。つまり、可視的な中心をもつこの装置は、その実、中心なしでも自己を律しうるハ主体Vを生産するための工場であり、社会の末端にまで遍在する不可視の視線の交錯のもとで維持されてゆく近代の秩序の機能図式になっているのである。

ここではほんの一端に触れただけだが、パノプティコンの中にはこのように秩序や知識をめぐる二つのヴィジョンが共存している。中心化された可視的空間における分類表としてのスタティックな秩序と、個々人が不可視の視線を内面化することで自らを監視し働かせるようになる機械装置としてのダイナミックな秩序。分類の学としての知識と、機械の技術としての知識。言いかえれば、そこでは一八世紀的な知が一九世紀的な問題とぶつかって大きく変容しようとしている。そして、このような変容をとらえ分析することこそ、この共同研究のひとつの目的なのだ。

ベンサムのみならず、フランスのイデオログやテクノクラート、ドイツの哲学者や国家論者において、この変容をどういう形でとらえることができるか。興味の尽きないところではある。

(浅田 彰)

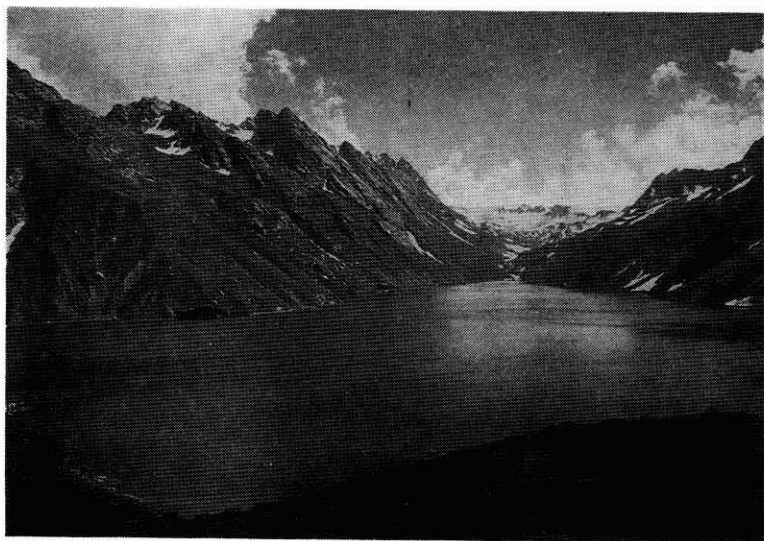
旅

カシミールの聖地あるき

井 狩 弥 介

カシミールのシュリーナガル空港に降りたとき、ここは空気がひかりとが違う別世界だと思った。つい数日前まで、インド東部のビハール州の祖先儀礼の聖地ガヤー、でまいにち雨に降られながら汗をかいて歩きまわっていたことを考えると、パキスタンと境を接するインド北西辺境のカシミール盆地は不思議な別の小宇宙のように感じられた。

この地は現在、住民の大多数がムスリムで、ヒンドゥーは少数派である。古くから東西交通の要所として有名であったこのカシミールには紀元前から仏教、ヒンドゥー教、そしてイスラーム教が次々に栄えてきている。私の目的は、余り報告されていないこの地でのヒンドゥー儀礼の伝承の現状を知りたいということだった。そしてさらに、共同研究班でいま取りあげている、この地で成



立した最古のサンスクリット文献に出るヒンドゥー聖地の跡を訪ねることも楽しみにしていた。盆地にある聖地には竜（ナーガ）の住むという伝説のある泉が多く、そのうちのいくつかは現在でも聖地として巡礼の対象になるという。A・スタインが中央アジアに出かける前にこの地の歴史地理をかなり詳しく研究しているの、これを手がかりにして歩き廻ったが、九十年前とは道路事情がかなり変わっていて、またこの間にさびれてしまった場所も多い。ヒンドゥーの古い聖地をこまかく訪ねる物好きは余りいないとみえて訪ねあてるのも簡単ではない場合が再三ある。最も興味を持っていたのはカシミール創成伝説にまつわる山中の湖だった。盆地の南、北インドの平原部とを隔てる山脈の中にあり、海拔四千メートルを遙かに越すところという。この近辺には知られていない多くの聖地跡があるように文献からは思われた。日頃運動不足をかこつ私は山登りには自信がない。しかし、山道に強い頑丈なポニーが使えたと聞いてその気になった。同行するガイドを頼み、往復三日がかりで湖に出かけた。初めのうちは馬上でゆったりと辺りの針葉樹の風景や遠くの雪山を眺めていればよく、山道を歩く鞍に当る尻の痛さを我慢できなくなれば馬から下りて歩けばよい。道で会うのは平野部から夏营地をこの高地に求めてきている遊牧民ばかりで、彼らの低い木造りの丸太小

屋やテントが点在する中を細い急流に沿って小石にたまらずながら坂道を登ってゆく。ところが行程が最後に近くなり、曲りくねった石まじりの急坂を登りだすとさしもの頼りのポニーがあえぎだし、遂には首を振って立ちどまる。どうなだめすかしても遂にはガンとして動かなくなるのである。私が降りるとやっと厭々ながら歩きだす。こういう訳で本当の山登りをする破目になってしまった。もう景色など眺める余裕などなく、あえぎながら最後の急坂を登りきると、眼下に雪山を背景にした深く蒼い湖が開けた。周囲を切り立った峰に囲まれ雪どけの水を集めた美しい湖である。このコンサルナーグ湖はカシミール創成のときヴィシュヌの神が残した足跡がそのまま湖になったという伝説がある。長さ三キロほどの細長い鰐形の、雪どけの水を集めた深い湖である。その南側に、ノアの箱舟の話に似たインドの洪水伝説で舟をつないだといういわれのある雪山が蒼い空を背景に光っていた。たゞ期待に反してその辺りには聖地跡らしきものは何も見当らない。湖の岸辺に石室がひとつあるだけだった。文献に語られる神々の庵というのは、おそらく湖を取り巻く峰々そのものを指しているのだろう。そう思いあたった頃には、その峰々の向こうに黒雲が湧きだして、同行したガイド氏が顔色を変えた。付近の散策もそこそこに急いで山を下りだしたが、案のじよう程なく雨

雲に追いつかれてしまった。山小屋までの帰途の五時間というもの、私たちは聖なる湖に住む竜神の歓迎を受けて、彼に贈られた凍りつくような冷雨のなかをずぶぬれとなって黙々と歩きつづけるほかなかった。

アメリカのユダヤ人

甚 野 尚 志

一九八六年夏から一年間、ハーバード大学に滞在して印象的だったことは、学生や教授の中に数多くのユダヤ人がいたことだった。ハーバードでは教授の約半数がユダヤ系アメリカ人であり、また、ゼミに出ていてこれは優秀だと思ふ学生の中に、たいていユダヤ人が含まれているという有様である。しかし現実には、ハーバードというピュリタニズムの伝統が色濃く残る大学で、ユダヤ人が受け入れられていった過程は、そう平坦な道ではなかったようだ。少なくとも第二次大戦の前まで、ユダヤ人学生に対する入学拒否のような事件がしばしば生じていたことは、ハーバードのセム系民族博物館に展示されている資料を見れば明らかである。

マルクスやサルトルはいうまでもないが、西洋の文化

の中では中世から近代にいたるまで、偉大だといわれる思想家はたいていどこかでユダヤ人問題を論じている。西洋の思想家たちが、ユダヤ人についてなぜかくも執拗なまでに深刻な言説を弄するのか、ハーバードに行くまで僕にはその社会的背景が理解できていなかった。しかし、ハーバードで一年間、A君というユダヤ系アメリカ人の学生と、日本語と英語の交換授業をしたことによって、生きた実感としてユダヤ人をめぐる問題に目を開かせることになったのである。A君は、さまざまなユダヤ教の習慣や祭礼についてことあるごとに僕に教えてくれたが、彼らがアメリカに住み英語を母国語としながら、ユダヤ人としての強固な文化的同一性を保っている姿には驚くばかりで、ひとつの宗教がこれほどまでに、人間集団に結束力をもたらすものとひたすら感心するばかりだった。とくに、彼らの反ユダヤ主義に対する、度が過ぎると思えるほどの警戒心は印象深い。アメリカには「クロー・クラックス・クラン」という白人純血主義と反ユダヤ主義を標榜する団体がいまだにあるが、社会不安があれば彼らの唱導によって、再びユダヤ人虐殺がおこりうると、A君が真顔で話していたのは忘れられない。帰国してから、日本ではユダヤ人に関する本が一時ブームだったということを知った。それらの本がどれほど、欧米の社会になお生き続ける反ユダヤ主義の伝統を理解

して書かれたのか、ということはおさておこう。だが、それを読む日本人読者の側に、キリスト教文化が暗黙のうちに培ってきたユダヤ人憎悪の根深さを理解できる人がどれほどいるだろうか。ユダヤ人と反ユダヤ主義の問題を生活の実感として意識しえたことが、ヨーロッパ中世史を研究しながらアメリカへ留学した者のささやかな成果といえようか。

羅浮山紀行

麥谷邦夫

一九七三年の夏、まだ日中航空路開設以前のこととして、香港経由で広州へと向かふ車窓から、遙か東北の方角に聳える大きな山塊を望み、あれこそ神仙家葛洪が隱棲鍊丹の地に選んだ羅浮山に違ひないと一人うなづき、いつの日か必ず訪はんと決意を固めてから、早くも十五年近い歳月が流れ過ぎてゐた。

広州から羅浮山のある博羅県まではほぼ百二十キロ。私の乗ったおんぼろバスは、昼食の休憩時間を挟んで約四時間を費して博羅県城へ着いた。途中の景色は、あたかも八幡平辺りの高原を思ひ出させる。博羅で一泊し、



翌朝一番のバスで長寧鎮へ。ここから羅浮山麓の冲虚観までは約六キロ。単車の運び屋の世話になる。自ら単車を駆つたことはあつても、タンデム・シートに乗るのは初めて。まづは、今日の宿である羅浮賓館を目指す。

羅浮山一帯は、実は解放軍の演習地となつてゐた。この賓館も駐屯地の中で軍隊が経営してゐて、従業員は全員軍人。ここで、登山のガイドを用意してもらふ。二十歳の兵士盧福成君。煙草好きの好青年であつた。彼らは毎年四、五回は完全武装の重装備で登山演習をするとのこと。水筒一つの空身で昼食も持たず、私の荷物を背負つて案内に立つてくれた。頂上までは約三時間の行程。

途中は、奇岩怪石の林立する険しい道であつた。ところで、この費用が僅か四元(百六十円)とは、清算する段になつて始めて知つた。いづこも同じ武士の商法か。

羅浮山麓には、冲虚観、九天観、西華道院等の道観が散在する。いづれも文革で破壊され、最近修復されたものである。中心となる冲虚観には葛洪夫妻の神像が祀られ、葛洪の鍊丹竈や彼の衣冠塚などが残る。西華道院は、冲虚観から三キロほど離れた山麓にあり、廃墟と化した旧本殿の後方に粗末な祠が建つてゐるだけであつた。二人の青年が管理してゐて、石碑の説明などをしてくれた。そのうちに俄雨が降り始めると、近くの彼らの住居とおぼしき掘建小屋に案内して、大変美味しいお茶を御馳走

してくれた。情熱的に宗教についての考へを話してくれたのだが、如何せん広東訛のきつい普通話では私にはよく理解できない。雨が上がり、お茶代を払つて帰らうとすると、そんなものはいらないと言ふ。職業的道士とは一味違つた清々しい印象を受けるとともに、葛洪以来の宗教的伝統が未だに根強く残つてゐることに感激を新たにした旅であつた。



書いたもの一覧 一九八六年二月～一九八七年二月(五十音順) ●印は単行本)

・赤松明彦

Vidhiadin et Pyatishedhavadin: Double aspect présenté par la théorie sémantique du bouddhisme indien, Zinbun 21 (1986).

・浅田彰

●共編著 CS・5

●編著 CS・54

晩年のフーコー著作集を読む

手帖

大地の歌の彼方に

序文―知恵の環

マトウラーナ+バレーラ「知恵の樹」朝日出版社 一〇月

解説―AIDSの/AIDSによる脱構築

島田雅彦「未確認尾行物体」文藝春秋 一〇月

子供の資本主義と日本のポストモダンズム

現代思想・臨時増刊 一二月

・浅原達郎

先秦時代の鐘律と三分損益法

東方学報 京都五九冊 三月

・飛鳥井雅道

幸徳秋水の文章

社会文学 一号 六月

●新修大津市史 第二一〇巻(共編)

大阪の宮崎夢柳

大津市 一〇月
衍書月刊 一一月

・荒井健

馮夢竜と「寿寧待詠」

颯風二〇号 一二月

・宇佐美 斉

プレヴェールの「朝の食事」 大阪日仏センター案内

一月

「オーソン・ウェルズのフォルスタッフ」(洋画時評)

映画新聞 一月

書評・清水昶著「ぼくらの出発―詩的一九六〇年代記―」

週刊読書人 三月

大島渚「マックス、モン・アムール」(洋画時評)

映画新聞 五月

エリック・ロメール「緑の光線」(洋画時評) 同 一一月

・梅原 郁

元祐党籍碑の周辺 書道藝術 一月号 一月

中国史のなかの長江 樺山紘一編「長江文明と日本」

福武書店 二月

北宋開封尹小考 「東方学会創立四十週年記念東方学論集」

東方学会 六月

・江田 憲治

中華工党と沈若山(学会発表要旨)

東洋史研究 四六卷三号 一二月

・奥村 弘

●相生市史第六巻近現代史料編(共編)

相生市 一二月

近代日本形成期の地域構造―地域社会の変容と地方制度改正をめぐる―
日本史研究 二九五号 三月

・河野 道房

李唐山山水画の特質―「万壑松風図」をめぐる―
美学 一四九号 六月

・アンヌ＝マリ・クリスタン

Heddomeros, théâtre de mémoire, *Littérature* no 65, Paris.

Pour une sémiologie des messages mixtes: le livre de peintre occidental, *Nichijutsu bunka* no 49. Traduction japonaise dans le *Bulletin de la société franco-japonaise d'art et d'archéologie* no 6, Tokyo.

Un livre visionnaire, *l'Histoire du roi de Bohême et de ses sept châteaux* de Charles Nodier, Actes du colloque *La présentation du livre*, Paris.

Espace et convention chez Eugène Fromentin: l'expérience de l'Algérie, *Equinox* no 1, Kyoto.

"La typographie", "L'illustration", "*Quelques-uns des mots qui jusqu'ici m'étaient mystérieusement interdits*" de Paul Eluard et Guy Lévis-Mano", encadrés pour *l'Histoire de*

l'édition française t. IV (1890-1950), Paris.

Towards a theory of mixed messages: The Experience of *l'immediate, Word- & Image*, décembre 1987, Amsterdam.

・桑山 正進

●大唐西域記「大乘仏典(中国・日本篇)」九 中央公論社 二月

Literary Evidence for Dating the Colossi in Bamiyan. *Orientalia Iosephi Tucci Memoriae Dicata. Serie Oriale Roma*, Ivi, 2. ISMEO (Roma), 1987. 七月

Kapishi and Gandhara according to the Chinese Documents. *The Collection of the Essays read out in the Vth International Seminar of Kushan Studies, Kabul*, 8-15 Nov. 1982. Kabul, 1987. 十一月

・小南 一郎

●「戦国策」の基礎的研究―説得文芸としての性格の探求―
(科学研究費成果報告書)

六博の宇宙論(上)(下) 月刊百科一九七・二九八号 三月

「山海経」研究の現況と課題

中国―社会と文化 第二号 六月
社の祭祀の諸形態とその起源 古史春秋 第四号 一月

・阪上 孝

ローの貨幣政策 (朝日百科・日本の歴史84)

●社会思想史(共著)

朝日新聞社 一一月
有斐閣 九月

・佐原 康夫

歴史地図・五〇〇年前後の世界——民族移動と宗教の伝播——

(朝日百科・日本の歴史44) 朝日新聞社 二月

歴史地図・七五〇年前後の世界——求法・巡礼・交易の旅——

(同右 55) 五月

歴史地図・一〇〇〇年前後の世界——諸文化の継承と伝播——

(同右 66) 七月

・佐々木 克

唐木さんの手紙 「回想 唐木邦雄」 審美社 二月

書評・加波山事件 「茨城県史料 近代社会編Ⅲ」 いはらき 九月

裕次郎が死んだ夜 「新宿あづま四十年」 審美社 一〇月

華族令の制定と華族の動向 人文学報 六二号 一〇月

●新修大津市史・第十巻・年表・便覧(共編) 河出書房新社 一二月

●図説日本の歴史 滋賀県(共著) 河出書房新社 一二月

・甚野 尚志

共訳・ルネサンスと人文主義 「叢書・ヒストリー・オヴ・ア

イディアズ」 平凡社 一月

・新保 敦子

中国の高等教育成人教育 日本社会教育学会編「社会教育の国際

的動向」 東洋館出版社 九月

自治体における国際理解教育

地方自治通信 地方自治センター 二月

・曾布川 寛

漸江に関する若干の考察 泉屋博古館紀要 第四巻 八月

明末清初の墨竹——徐枋・王鐸・戴明説——

松濤美術館「中国の墨竹」 一二月

・多田 道太郎

●昭和マンガのヒーローたち (共著) 講談社 一月

逆説の抵抗——安田武氏へ ちくま一九〇号 一月

街角からの視線 朝日新聞 一月

考古学と風俗学そして路上観察学(対談) 週刊読書人 一月

●日本語グラフィティ (共著) 河出書房新社 二月

耕治人「一条の光」 日本小説をよむ会会報二九八 二月

日本人の美意識 「茶道聚錦1 茶の文化」 小学館 三月

瀬戸内晴美 「諧調は偽りなり」解説 文春文庫 四月

幻実の馬たち——小説家が出会った馬

DIGNITY FOR LADIES 五月

思想としての水洗便所 「現代風俗通信」[77~86]

フランス語と日本語 「神陵文庫」第二巻 学陽書房 六月

しぐさと社会空間 「室礼先人今人」 三高自昭会 六月

富士正晴 野辺の送り ミサワホーム総合研究所 七月

桑原武夫先生の業績 群像四二巻九号 講談社 九月

無常の構造——言うに言えない道 京都新聞 一〇月

愛媛新聞 十一月

樹木の影は冴えてくるか(対談) 「ノスタルジック・タウン」

— 現代風俗'87」 リプロポート 一一月

気と日本文化(対談) CEL 第四号 一一月

・田中 淡

●建築及び庭園遺構にみられる中国古代遺制の調査

59年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書 三月

(中国) 社会 「日本大百科全書」 一五巻 小学館 五月

(中国) 文化 同右

中国建筑 同右

中国建筑からみた寝殿造の源流

古代文化 三九巻一—号 一一月

解説・北魏塔婆様式の系統について 足立康著作集

三「塔婆建築の研究」 中央公論美術出版 一二月

浄土寺の沿革史 「魅惑の仏像 20・阿弥陀三尊」

毎日新聞社 一二月

浄土寺の年表(編) 同右

コメント・浅川滋男「灶間の民族誌——江浙のカマドと台所」

「カマド神と住空間の象徴論——続『灶間の民族誌』」

季刊人類学 一八—四 一二月

・谷 泰

●牧畜文化の原像(福井・谷共編) 日本放送出版協会 一月

家畜管理の諸形態——西南ユーラシアにおける放牧羊群の管理——

「牧畜文化の原像」(福井・谷共編) 一月

Preliminary Notes on the Flock Management Techniques of

the Bakkalwala and the Ladakhi Shepherds in the North-western India, in *Preliminary Report on the Millet Cultivation and its Agro-pastoral Culture Complex in the Indian Subcontinent* (ed. by S. Sakamoto), Kyoto University. 三月

●社会的相互行為の研究(編) 京都大学人文科学研究所 三月
会話における笑い——その表出機能の追及—— 「社会的相互行為の研究」 三月

●Domesticated Plants and Animals of the Southwest Eurasian Agro-pastoral Culture Complex (ed. by Tani and Sakamoto). 三月

Two Types of Human Interventions into the Sheep Flock: Intervention into the Mother—Offspring Relationship, and Raising the Flock Leader—Their geographic distribution and meanings among southwest Eurasian pastoralists, in *Domesticated Plants and Animals of the Southwest Eurasian Agro-pastoral Culture Complex* (ed. by Tani and Sakamoto). 三月

経験的世界からみた会話の位置——齟齬・誤解・欺瞞——

ウサギの耳はロバの耳——ウサギはなぜ食べられないか—— 家族療法研究 四—二 一一月

季刊人類学 一八—四 一二月

・礪波 護

- 古代文明の成立（朝日百科・日本の歴史40、共編）

朝日新聞社 一月

- 宮崎市定「アジア史概説」（中公文庫）解説 中央公論社 二月

- 五〇〇年の世界（朝日百科・日本の歴史44、共編著）

朝日新聞社 二月

- 中国貴族制社会の研究（共編）

京大人文科学研究所 三月
同右

- 嵩岳少林寺碑考
中国都城の思想（日本の古代九 岸俊男編「都城の生態」）

中央公論社 四月

- 七五〇年の世界（朝日百科・日本の歴史55、共編著）

朝日新聞社 五月

- 浄土変相、勢至ほか「日本美術史事典」

平凡社 五月

- 宮崎市定「科学史」（東洋文庫） 解題

平凡社 六月

- 一〇〇〇年の世界（朝日百科・日本の歴史66、共編著）

朝日新聞社 七月

- 宮崎市定「隋の煬帝」（中公文庫）解説

中央公論社 九月

- 一七〇〇年の世界（朝日百科・日本の歴史77、共編著）

朝日新聞社 一〇月

- 一八〇〇年の世界（朝日百科・日本の歴史88、共編著）

朝日新聞社 一一月

- ・中村 賢二郎

歴史読本ワールド七号 四月

書評 青山吉信・木村尚三郎・平城照介編「西欧前近代の意識と行動」 史学雑誌 九六編六号 六月

- ・羽賀 祥二

「民政」権力と領域統合（上）——幕末期の所領問題——

人文学報 62号 一〇月

- ・狭間 直樹

書評 陳舜臣著「中国の歴史 近現代篇1 黄竜振わず」

週刊読書人 三月二日

日本京都大学人文科学研究所中国近代史共同研究班簡介

史学情報 一九八七年三期 七月

「三大政策」と黄埔軍校 東洋史研究 四六卷二号 九月

何天炯与孫中山——宮崎滔天家藏書札研究（共著）

歴史研究 一九八七年五期 一〇月

「三大政策」についての若干の考察

中国研究月報 四七七号 一一月

- ・林 巳奈夫

中国古代における蓮の花の象徴 東方学報 京都五九冊 三月

- ・平田 由美

レトロスペクション・プロスペクション 言語生活 九月号

- ・藤井 讓治

江戸幕府老中制の形成(2) 人文学報61号 三月

- 中川家文書（共編）

臨川書店 三月

- 木津町史史料編Ⅲ（共編）

四月

- 小浜市史諸家文書編三

一二月

・前川 和也

The Agricultural Texts of Ur III Lagash of the British Museum (V), *Zinbun* 21 (1986).

The Agricultural Texts of Ur III Lagash of the British Museum (V), *Acta Sumerologica* 9 (1987).

Collective Labor Service in Girsu-Lagash: The Pre-Sargonic and Ur III Periods, in *Labor in the Ancient Near East: American Oriental Series* 68 (ed. M. A. Powell), New Haven, 1987.

・麥谷 邦夫

陶弘景「中国思想史(上)」 ぺりかん社 三月

唐・玄宗「道德真経」注疏における「妙本」について 平河出版社 三月

道教と宗教文化

●養性延命録訓注「中国古代養生思想の総合的研究」研究成果報告書之三 三月

南北朝隋唐道教教義字管窺 「日本学者論中国哲学史」 中華書局 五月

・村田 裕子

●中国文学最新事情(共著) サイマル出版会 二月

中国のSF小説「中国年鑑」一九八七年別冊「中国新时期文学の二〇年」 大修館書店 六月

・山田 慶兒

●日本技術の原型(朝日百科・日本の歴史38、編著)

●暦と年号・度量衡(同右47、編著)

「易」占(同右52)

度量衡と静力学的世界像(获生徂徠全集月報7)

●本章の世界と鉦山町(朝日百科・日本の歴史82、編著)

・山下 正男

数学と哲学

・山本 有造

解題・張公権ならびに「張公権文書」について

「張公権文書」目録

円とドルの百年史

両・円切替期における通貨と記帳——大坂・山口家勘定帳

および備後福山・延藤家勘定帳の事例に即して——

書評 浅田喬二・小林英夫編「日本帝国主義の満州支配」 人文学報 61号 三月

アジア経済 二八巻五号 五月

・横山 俊夫

在仏日本公使館雇フレデリック・マーシャル

梅溪昇・嶋田正・本山幸彦ほか編「ザ・ヤトイ——お雇い外人の総合的研究——」 思文閣出版 四月

●*Japan in the Victorian Mind, 1830-1880*

London: Macmillan 五月

書評 佐伯彰一・芳賀徹編「外国人による日本論の名著——

ゴンチャロフからパンゲまで——」 文化会議 八月号

ヨーロッパに伝わった不思議の国（朝日百科・日本の歴史78）

朝日新聞社 一〇月

書評 ハルミ・ベフ「イデオロギーとしての日本文化論」

正論 一月号

日本人の国際化（討論参加） 総合研究開発機構編・事典

一九九〇年代日本の課題 三省堂 十二月

歴史と未来（祖父江孝男・中内功と鼎談）

サンケイ新聞 一二月二五—六日

・吉川 忠 夫

「静室」考 東方学報 京都五九冊 三月

感銘を受けた本

・新井晋司

武田 建「フットボール・クレイジー」

タッチダウン社

鄭玄の学塾「中国貴族制社会の研究」

京都大学人文科学研究所 三月

顔師古「中国思想史（上）」 ぺりかん社 三月

償債と謫仙（上）（下） 月刊百科二九五・二九六号

●書と道教の周辺 五月、六月

平凡社 一〇月

「一物をして違わしめ難し」私考 鑑賞中国の古典「杜甫」

角川書店 十二月

・林 武 実

18世紀初頭の福建方言に就いて——篠崎東海「朝野雜記」の中

の長崎通事唐話会の記録から——

中西学園研究紀要 特輯第2号 六月

・小南一郎

ミハイル・バフチン「フランソワ・ラブレールの作品

と中世・ルネッサンスの民衆文化」（川端香男里訳）

せりか書房

・樋口謹一

隆慶一郎「吉原御免状」（新潮社）

人

文

第三四号

一九八八年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

中西印刷株式会社

非売品